
魔不良冒険奇行 ~電撃！学園都市編~

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔不良冒険奇行 ～電撃！ 学園都市編～

【Nコード】

N5088Y

【作者名】

ヒロ

【あらすじ】

天然種超能力不良少年・伊吹圭介がありったけのネタをかき集め目的のブツを探しに行く話です。

舞台は学園都市。テーマは「とある魔術の禁書目録」「とある科学の超電磁砲」になります。

今回の闇のご依頼は「最終兵器」　　って、なんだ？

400ccの4サイクルエンジンが腹の底で小刻みに鼓動を繰り返し、右の靴底の向こうでは断続的に温室効果ガスを垂れ流す。環境にも財布にも悪い、まことに前時代的な中型バイクを伊吹圭介は非常に気に入っていた。

17歳の彼がこのバイクに乗り出してから日は浅い。またこのバイクは突然しゃべりだしたりも空を飛んだりもしない。陸上を走る当たり前の二輪駆動だ。なにげなく手を置いたボディには赤い手製のペイントのムラがやや目立っている。それでもわざわざ煩わしい検査を受けてまで、こうして“こんなところ”まで乗り込んできたのだ。愛着の強さの証左と言えるだろう。

エンジンを切り、かぶったフルフェイスのバイザーをあげる。赤いレザージャケットの内ポケットから、やや煤けた紙を取り出した。目的地までの略図のはず。だが、インクが乾く前にたたんでしまったせい、まるでなにも読み取れない。せいぜい、これから歩む未来の暗喩でないことを祈るだけだ。

「……どー、すつかよお」

ヘルメットを脱いで薄く汗ばんだ黒髪をかきあげ、やれやれと肩を落とした。

これは圭介が学園都市でついた悪態の、はじめの一回になる。

学園都市。そこは人の英知を司る場所だと聞いていた。20年先の技術を持つだとか量子演算のスーパーコンピューターがどうだとか能力開発がなんとかかんとか。

しかし伊吹圭介という一個人にしてみれば、まことにどうでもいい話だった。むしろ嫌悪すら感じていた。

学園都市。学園。学校の街。勉強ですべてが埋め尽くされているイメージだ。勉強嫌いで中卒のフリーターにしてみれば死にたくなるような地獄の光景がありありと想像できない。いつそのこと現場から数本抜いてきて発破、汚い花火に変えてやりたいという衝動は弱くない。そうして物理的に支配構造を打ち砕き若い力をスパークさせてやるのは決して間違いではないはずだ。そうだそうに違いない。などとテロリストじみた思考を悶々と重ねていた圭介だったが、実際中に入ってみれば、なかなかどうして、直接伝わる街の雰囲気は悪くない。でかい扇風機が何本も並んでいる様はまさに奇天烈だが（風力発電機なるものを圭介は知らない。せいぜいドン・キホーテが突っ込んでいく風車程度である）、空を飛ぶ飛行船にはロマンが溢れているし、うねうねとゴミ箱が動いて街に学生然としたガキ共が多いことを抜かせば普通の街といって差し支えない。路地裏には圭介と同じにおいをつけてそうな少年少女すら見て取れる。勉強の街にも裏表はあるようだ。そういう部分には共感すらもてそうだ。

さて。それはそうとして、だ。

地図がない。もらった地図らしい紙に描かれているのはただの地獄絵図である。行くべき場所がどこにあるかわからない。こんなことなら施設の名前くらい聞いておけば いや、どうせ覚えられないから意味がない。

聞き込みでもするしかないだろう。断片的な情報は手元にある

のだ。だがしかし。無学な圭介には果たしてそれが“ある”ものなのか、甚だ疑問であった。聞いたことはある。しかしアニメマンガの中、空想世界の話である。ここがいかに20年先を行っていようが、圭介の常識は聞いた覚えのあるバイクメーカーが二足歩行ロボットを作って稼働時間十数分でのろのろ歩く程度の技術だ。圭介にしてみれば既に理解不能な技術レベルだが、見ていてバイクほどにボルテージも上がらない。あれが20年でどう進化するかは想像もできないが、それは圭介が必死に覚え込まされた都市伝説のような与太話に匹敵する気がまったくしない。聞いて笑われてせいぜいだろう。

「なんて、言ってもらんねーか」

肩をすくめ、圭介はもう一度ぐるりと周囲を見渡した。適当に話ができそうな人間に当たりをつけなくてはいけない。情報収集のために話しかけるのだ。根暗と馬鹿は駄目だ。ある程度真面目にこちらの話を聞いてもらわなければならない。焦っている人間や早足に急いでいる人間も駄目だ。それでいて ああ、もう。わけわからん 圭介が舌打ちする。途端に周囲の学生がビクツと身を震わせた。

馬鹿筆頭の自分が利口に振る舞おうとするのがそもそも間違いなのだ。唯一無二の直感を信じるべきだ。目を凝らし、周囲の人間にざっと注目して 決めた。

「おいそのガール。お前だお前。奇抜なお前だ」

無遠慮に人差し指を伸ばしてひとりの女の子を指差した。圭介をして奇抜と揶揄された彼女は、確かに人混みの中でよく目についた。決して涼しくない気候の中で丈の長い服装、それも修道服である。圭介の声が届かなかったのか、修道女は止まらない。しかしあれだけ浮いた見た目ならどんな馬鹿でもまず見失わない。

あの身なりなら確実に何かしらを知っているに決まってる。そうした根拠のない自信に溢れた憚然とした態度で、圭介は修道女に「まずか」と近づいていく。道行く学生は揃って後ずさって圭介を避

け、修道女までの道が自然と出来上がる。周辺の人間の雰囲気とは明らかに異なる圭介が寄ってきてか、はたまたざわつく周囲を怪訝に思ってたか、修道女はぴたりと足を止めて圭介に顔を向けた。

「いきなりで悪い。あんたと話がしたい」

「す」

据わった目で修道女がくちびるを弱く動かした。長い銀色の髪が揺れて頬を叩く。それで緑色の目の前がいくらか遮られていても構わない。ゆらりゆらりと体を揺らすその異様さは、数々の修羅場をくぐり抜けてきた圭介をして身構えさせるほどの迫力を帯びていた。生唾を飲み込み思わず拳を握り締めた圭介に向け、修道女はもう一度、口を開く。

「おなかすいた」

瞬間、圭介は脱力した。

* * *

「もう大変だったんだよ。冷蔵庫になにも入ってなくて、飢えて死んじゃうかもって」

手近のファストフード店の安くて質素なハンバーガーの封を破り、幼い修道女はそれにかぶりつく。あわや自分の手まで食いちぎりかねないその勢いに、圭介はただ言葉を失った。腹が減ることの重要性。それは世界的な飢餓や歴史的な革命を引き合いにしたものではなく、ここではただ単純に彼の実体験によるものである。

は彼も知るところである。しかし、知らない野郎にホイホイ付いて来るのは問題ではあるまいか。

「この間は学校から早く帰ってきてくれたからいいけれど、とうまったらお昼を過ぎてもぜんぜん来ないからまたこうやってとうまの学校めさしてたんだよ」

また“とうま”か。

店に入ってからの一時間、繰り返し繰り返し繰り返しハンバ

「ガーの間から出てきている言葉だ。どうやら名前のようで、一緒に住んでいるらしい。語感から彼か彼女かはわからないが学生らしいそのヴィジュアルを圭介は特徴のない二頭身でイメージした。いかつい髭面は、間違いなく縁日で売られるダルマの体裁を取っていた。

「うん。ごちそうさまでした。ありがとう。インデックスさんのお腹はいっぱいかも」

「あー、んじゃあインデックスさん？ 俺聞きたいことあんだよ」

「なに？ 幸せ気分な今の私は、懺悔を快く受け付けちゃうよ」
「……」

ざんげってなんだ、という疑問文を無理矢理飲み込む。難しい話を聞いて頭が痛くなるのはゴメンだ。

「ロボット見たことないか？」

「ろぼ……つと？」

「えーと、ドリルとか出る。たぶん。二足歩行。たぶん。変形合体する。たぶん。ビーム出る。たぶん。あと10万馬力。たぶん」

「おおー。なんかすごそうだね」

圭介の曖昧な説明に、インデックスは抑揚なく感想を述べた。首を傾げつつ、なんだかテレビで見たことあるかも、と一言付け加える。

「テレビ？ どんなんだ？」

「カナミンの番組。おつきいけどこの間壊れちゃったんだよ」

「壊れたのか。なら違う。俺以外には壊せないらしいぜ」

「けいすけは強いのか？」

「これでもタイマン無敵だぜ。半端な奴には負けねー」

「ふーん」

見得を切つてまで言ってみせた無敵宣言を軽くないなされ、圭介はどつと肩を落とした。ストローに口を付けてコーラの味で気分を切り替える。単純思考の特権のようなもの。さっさと話の切り口を変えることにした。

「腹も膨れて、どうするんだ？　これから」

「んー、とうまをこのまま迎えに行くのもやぶさかじゃないかも」

「よっしゃ、なら行くこうぜ」

「もちろん。でも学校の場所がいまいち……えっ？　いつしよに来るの？」

「おう。そいつにも聞いてみようと思つてさ」

「でもどっちに行けば学校なのかよくわからないだよ」

「ばっちこい。そういうときはこの秘密道具があるぜ」

そう言つて赤いレザージャケットのポケットをまさぐつて、圭介はまた見得を切つた。

「てれれれーん。由緒正しい六角エンピツうー。こうして先が鋭い方を下にして会いたい人を思い浮かべて手を離す。するとエンピツの指す方向に　」

「ちよつと魔術を馬鹿にしすぎなんじゃないかな！」

いやでも凄いだぜこいつ現役時代の選択問題は負け知らずで
そうした経験を交えた反論を展開しかけたが、インデックスの
極めて真面目かつ鬼気迫る表情を前にして、圭介は大人しく閉口し
た。

結局、勘に頼ることにした。自信の理由はまた噛みつかれないように押し黙っておく。

道中、何度も幾度も“魔術とはなんたるか”を力説され、圭介の使う百戦錬磨の“熱血必中！バスターエンピツ（正式名称）”は徹底的に蔑まれた。やや気落ちした圭介だったが、特に異も唱えずに黙々と重いバイクを引いていく。ここで彼女に口答えすれば、間違いなく拳に訴えかけることになるだろう。確かに彼女はどのようなもなほど凶々しく遠慮のないクソガキであるが、まだ圭介の思う“一線”は越えていない。尤も、この調子なら時間の問題だろうが。

一通り言い終えたようで、インデックスは胸元に保管していたらしい猫を抱きかかえて戯れている。気疲れした圭介はぐったりと肩を落として逃げ場所をすぎるようにして視線を泳がせた。

ふと、視界の端が青白く発光した。

思わず足を止め、顔を向ける。人気の薄い河辺の道だ。手すりの向こうで再度発光。雑踏の中で聞こえづらいが、どうやら手すりの向こう側、足元には道があるようだ。

インデックスを放って、興味本位に足を向ける。バイクを歩道に乗り上げ手すりの向こうに首を伸ばした。

「ほら、これでわかったでしょ？ さつさとどっかに消えなさい」
やたら勝ち気で高圧的な茶髪が及び腰のチャライ金髪少年と相対していた。茶髪の後ろには、似たような服装の黒髪と、両手にビニール袋を抱えた学ラン姿の少年が控えている。少年は黒いウニのようなツンツン頭である。そういえば道中、何度か見かけた髪型だ。色は金だったり青だったりしたが、ここではあんなのが流行っているのだろうか。

茶髪の周りが青白く発光した。

電流か？

「これに懲りたらさっさと帰りなさい。さもないと」

「やめるビリビリ！……もういいだろ」

「はあ？ この子が嫌がってるのに無理矢理……その、迫ってたのよ？」

「ただのナンパみたいなものだろ。そりゃあ確かにそいつはガラ悪そうだし、この子も嫌がってたさ。でも暴力に訴えてた訳でも、大勢で寄ってたかった訳でもないんだ。あんまり」

「そう。あんた、こいつの肩を持つんだ」

またビリビリの体の周りが紫電に照らされた。感情の高ぶりに呼応するように紫電はその軌跡を増やしていく。圭介は直感する。

これが噂の“能力開発”か。

肌が攻撃の意識を敏感に探り当て、様々な喧嘩で培った鼻はその狙いを嗅ぎ分けた。既にビリビリははじめのチャラ男など眼中になく、平気で背を向けてレジ袋両手の少年に攻撃する気なのだ。チャラ男はもう戦意を喪失しているようで、悪態も漏らさず走り去っていく。

一層ビリビリの攻撃の意識が高まる空気を感じ取った。ウニ頭が身じろいだ。その隣の黒髪少女は動けていない。ビリビリの威圧に足がすくんだようだ。

圭介の直感がささやく。まずい。このままだと。ビリビリがなにをしようとしているのかはわからないが、強い攻撃が出る。拳よりも遠い場所になにかが撃ち出される。そのままやれば、ウニ頭も黒髪少女もまずい！

「おいお前」圭介は注意をそらそうと鋭く言葉を発し「あーっ！　とうま見つけたんだよ！」

急に脇から聞こえた声に、圭介は思わず視線を走らせた。インデックス。放っておいたのだが、律儀に付いていたようだ。

「インデックス！？　どうしてこんなところに？」

「とうまが悪いんだよ！　ごはんがなくて飢えて死にそうだったかも！」

「……」と、ごめんなさい」

ビニール袋を抱えたまま、とうまはがっくりとうなだれた。とうまに釣られるようにビリビリの意識もインデックスの方に散ったようで、攻撃の意識が弱まっていく。これ幸いと黒髪少女は軽く会釈を入れて、やはり走り去っていくのを圭介は見逃さなかった。

「インデックスさん。あのウニがとうまなのか？」

「そうだけど……とうまは食べられないからウニって言うのは語弊があるかも」

普段噛みついてる私が言うんだから間違いないんだよ、とインデックスが胸を張った。その様を軽く無視し、圭介は手すりから軽く身を乗り出した。

「あんたがとうまか。思いのほかすつきりした顔してんのな」

「えっ……と、ありがとうございます……？」

「とうまはロボット知らないか？」

「はあ？ ロボット……そこらの清掃ロボットとは違うんで？」

「……えっ、あれもロボットなの」

驚く圭介にまたとうまは驚いて、本当に現代人なのか、と呆れ顔で呟いた。

「まったく、あなたは本当に……！」

攻撃の意図が強まり、ビリビリの体の紫電が膨れ上がる。来る。圭介は反射的に身を乗り出した。

「どこまで人を馬鹿にしてるのかしらっ！」

ビリビリの伸ばした指先に従い、青白い光の束。電撃が空気を切り裂いてとうまに襲いかかった。とうまは反射的に顔を守るように腕を上げる。そのとうまの“反射”と圭介の次の“反射”は、ほぼ同時だった。

背中に電撃の光量と熱量を感じつつ、圭介は降り立ったアスファルトを躊躇わず蹴り飛ばして疾走し、半ばタツクルのようにしてとうまを抱きかかえて後退させた。ビリビリを振り返ると、今までとうまが立っていた場所は焦げて黒く変色していた。

本気か？

こんな“能力”を人に向けた？　こんな簡単に？

許容できない“一線”が越えられたことを感じ取り、圭介は拳を握り締め。

「卵おおおおおおお！！」

耳元でとうまが叫び、圭介は直感で視線を上げた。レジ袋が宙を舞う。はだけた中身に卵パツクらしいものが認められる。

また直感が圭介を突き動かした。

とうまを放り出して地面を蹴り上げ、レジ袋に手を伸ばす。

目一杯広げた指が　捉えた。レジ袋の端を引っかける。手探り

にそのまま引き寄せ、両手に抱きかかえ。

圭介は見事、川に落ちた。

* * *

「本っ、当にありがとございました！」

「お、おう」

見ていて気の毒に思えてくるほど頭を下げ続ける当麻に対して、圭介は反応に困りつつ、とりあえずは濡れたシャツなぞ絞って水気を抜いてみせる。

9月頭のこの時期は残暑というのも苦しい過ぎやすい日和で、水浴びの旬はとうに越している。確かに気を病むかもしれないが、圭介は生まれてこの方、風邪を一度も引いたことのない人間である。頑丈は彼の自慢のひとつだ。

「にしてもよ」雫の滴る金髪を指先で絞りつつ、当麻とビリビリを交互に見やる「お前ら痴話喧嘩も大概にしるよ」

「痴話喧嘩ってなんですか！」「なななななにいつてんのよあんだ！」

「だってそうだろ。いくら電撃出しても当麻には効かないらしいじやねーか。八百長、猿芝居、出来レースもいいとこだ。人の見てないところでやれ」

顔を紅潮させてうろたえるビリビリを無視して、まあなにもなかったからいいけど、と圭介は一度大きくため息をついた。

「卵も無事か？」

「はい。御坂に手伝ってもらってゲットしたお一人様一品限りの卵2パック。貴重な明日からのたんぱく源……！ ああさようならもやしの日々よ……！」

「なら俺も体張った甲斐があった。味わえよたんぱく源」

「はい。喜ベインデックス！ 今日卵パーティーだ！」

「たつまご！ たつまご！ たつまごーっ！」

ずぶ濡れの代価を見つめ、悪くない買い物だったと圭介は思った。損得勘定はもちろん不得手だ。なんと言っても馬鹿である。しかし馬鹿なりにも得できた気分になる。これはそんな温かな 或いは、可哀想な光景だった。

「……おい、そろそろ聞いてもいいか？」

「ああ、ロボットの話だったよな？ えーと、ドリルと二足歩行とビームと変形合体と10万馬力……？」

「知らないか？」

「っていうかなんだその適当に要素かき集めただけのスーパーロボット」

「バレたか」

「いやバレたかってあんた」

「実はどういふのかよくわからねーんだ、これが。どうもすげー強くて俺しか壊せないらしいんだが」

「なんだそりゃ？」

「俺に聞くな」

「はは……なにか知ってるかビリビリ？」

乾いた笑いを浮かべた当麻に話を振られ、ビリビリはびくりと

うろたえた。頬はまだ赤く、見るからに動揺している。一連のリアクションを見て、馬鹿だが勘のいい圭介はなんとなく、ビリビリの当麻に対する好意を理解した。それが恋心か友情か、はたまたもつと別なものか。それは判断しかねるが、相当想われているのは確からしい。

当然話も聞いていられたはずもなく、あたふたと視線を泳がせた。

「ロボットを知らないか」助け舟を出すことにした。「とりあえず強くて俺にしか壊せないらしい」

「強い……っていうと警備用や軍用のオートマトンとか？」

前髪をいじりながら、落ち着かない様子でビリビリが答えた。頬は飽きもせず赤い。

「よくわからないがそのオートマトン？　はロボットなのか？」

「あなたのロボットがなんなのかは知らないけれど、科学の観点から言えば間違いなくロボットよ」

「どこに行けば会える？」

「そうね……後輩の風紀委員に頼んだら、もしかしたら」

「ありがとう！」

ビリビリの言葉が終わらぬうちに、圭介はビリビリの両手を握った。ふえ、とビリビリの声が裏返る。腕に一瞬、雷光が走った。

「iiiiiiiiやつだだだだだななびりびりびりびりびりびりりりり」

「び、ビリビリ！　やばいつて！　電気流れてるから流れてるからっ！ー！」

「えっ……あう、離しなさいよあんたが！」

「できできできななひひひんだんだん」

「電撃で筋肉が弛緩して手が開かないんだよ！　御坂！　能力を止めろー！」

「わかつてるわよ……う、うまく頭が回らないのよあんたのせいでっ！」

「よよけいっつつよっよっよっよなてててて」

「あーっ、くそ！」

目の前が真っ白になったこの先を、圭介はよく覚えていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088y/>

魔不良冒険奇行 ~ 電撃! 学園都市編 ~

2011年11月20日20時26分発行